

ジイジ・バアバ、
パパ・ママへ贈る

心ココロのめばえ

アヤと過アヤトのジイジの日記

<17>

著者／牟田 泰二
挿絵／橋本 礼子

4歳6カ月
なぜ、なぜ？

晴れて風もなく、冬にしては穏やかな日である。アヤとお散歩しながら空を見上げた
ら、ちょうど飛行機雲が出来ていた。

ジイジ「アヤ、見てごらん。お空に飛行機雲だよ」

アヤ「わあ、真っ直ぐだね」

ジイジ「そうだね。飛行機が飛んだあとに出来るから真っ直ぐなんだよ」

アヤ「どうして飛行機が飛んだら雲ができるの？」

ジイジ「ジェット機はね、排気ガスというのを出してるからね、それに水蒸気という水の玉が
くっついて雲になるんだよ」

アヤ「雲はどうして浮いてるの？」

ジイジ「水蒸気という水の玉はね、とっても軽いから、落ちてこないんだよ」

アヤ「じゃあ、雲に乗れるの？」

ジイジ「いや、それはだめだよ。だって、アヤのほうがずっと重いから、落ちてしまうよ」

アヤ「雲は浮いているのに、アヤはどうして落ちちゃうの？」

ジイジ「シャボン玉は軽いから浮いている
でしょう。でも石は重いから落ちるで
しょう。それと同じだよ」

アヤ「じゃあ、シャボン玉に石を載せた
らどうなる？」

ジイジ「そりゃ無理だよ。シャボン玉が割
れるでしょ」

アヤ「でも、割れないシャボン玉があっ
たら？」



こうして延々と「なぜ、なぜ」が続く。
最後にはジイジが降参することになる。

どうも、アヤはそれを狙っているらしい。

これは幼い子によくあることだ(注・力学的には、重いものも軽いものも重力に引かれて同
じように落ちる。しかし、空気による浮力が重力に逆らうために軽いものは空中に浮く。ア
ヤへの説明の都合上、力学的に厳密な話は省略している)。

こんなことをしていると、なぜか懐かしいような感覚がよぎる。そういえば、遠い昔にそん
なことがあったような気がする。そうだ、記憶が蘇ってきた。私が幼かった頃に、子守をして
くれていたヨシちゃんに同じことをしていたように思う。

私が生まれた家は祖父が経営していた駅弁当屋であった。駅弁当屋では、朝早くから沢
山の弁当を作り、それを国鉄(現在のJR)の駅で売り子さん達が売っていた。大勢の使用
人さん達と一緒に、母も早朝から忙しく働いていたので、幼ない私の世話をすることが出来
なくて、子守さんを雇って私の面倒を見てもらっていたのだ。ヨシちゃんは私が小学校に入る
頃までずっと母親がわりをしてくれた。

そのヨシちゃんを「なぜ、なぜ？」で困らせていたのだ。しつこい質問にヨシちゃんが返答に
窮すると、なにか勝負に勝ったような達成感を感じていたように思う。

きっとアヤもこの感じを味わっているのではないだろうか。だからどこまでも「なぜ、な
ぜ？」を続けるのであろう。最後に「まいった」と言ってみると嬉しそうな顔をしている。

その懐かしいヨシちゃんも、最近九十五才という高齢で亡くなってしまった。ジイジの幼年
時代を語り合える人はこれで誰もいなくなってしまう。

プロフィール むたたいぞう 1937年、福岡県生まれ。
九州大学理学部卒業、東京大学大学院物理学専攻修了、
理学博士。京都大学助手、助教授、広島大学教授、学長、福
山大学学長などを歴任。主な著書に「語り継ぎたい湯川秀
樹のことば」(丸善出版)、「電磁力学」(岩波書店)、「量子力
学」(裳華房)などがある。東広島市在住。

ジイジへのお便り

エッセーを読んだ感想などを、お寄せください。
weekly@pressnet.co.jp
「心のめばえ」係へ